

第2章 学ぶことへの関心・意欲を高める指導の在り方

第1節 国語

1 基本的な考え方

(1) 国語科における学ぶことへの関心・意欲を高める指導の基本的な考え方

当初の予定よりも少し遅れていた高等学校の学習指導要領が告示され、いよいよ新しい学習指導要領が出そろった。今回の中学校国語科における改訂では、10年前に設定された教科の目標がそのまま変わらなかった。伝統的な言語文化に関する指導の重視のほか、充実や改善すべき目標がたくさん示されているが、今回の改訂は、基本的に現行の学習指導要領のバージョンアップとしてとらえられるものであり、趣旨を継承しつつ内容を充実させたものであることは間違いない。そのような意味で、国語科の場合は、新しい学習指導要領の内容について触れることが現行の学習内容を踏まえることにもなるので、ここでは新しい学習指導要領の内容を基本にして論をすすめていくことにする。

中学校国語科の教科の目標は、次のとおりである。

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。

これを、少し視点を変えて単語で整理し直してみると、以下のようになる。

1. 適切に表現する	2. 正確に理解する能力
3. 伝え合う力	4. 思考力
5. 想像力	6. 言語感覚
7. 国語に対する認識	8. 国語を尊重する態度

1. 育成する	2. 高める
3. 養う	4. 豊かにする
5. 深める	6. 育てる

前段では「表現と理解は、連続的かつ同時に機能するものであること」が明確に位置付けられている。社会生活で生かされることを意識しながら、人間と人間の関係の多様な場面の中で、立場や考えを尊重する言語能力の育成を求めている。

後段では「論理的に思考し、豊かに想像し、言語の感覚を磨く」ことを求めている。小学校で「養う」と表現されている部分が、中学校では「豊かにする」と表現されていることからわかるように、知的な認識だけにとどまらず、感覚を豊かにして充実させることがもの見方や考え方を一層個性的にする、という認識のもとに指導を行っていくことが求められている。

関心・意欲を高める工夫の前提として、指導者である教員が「私たちは何をすべきか」という目標を明確に認識しておくことが大切である。その上で、それぞれの領域の目標を関連付けながら、教員自身が自分の個性をしっかりと生かせる指導方法を構築し、調和的に指導を行わなければならない。それが、いわゆる「学校の先生」としての指導の基本となり、教材研究の楽しみにもつながっていくのである。

(2) 国語を学ぶことに対する意識について

平成20年度全国学力・学習状況調査の結果は、次のとおりである。

質 問		全国 (%)
国語の勉強は好きですか	小	56.1
	中	55.2
国語の勉強は大切だと思いますか	小	89.4
	中	87.3
数学の勉強は好きですか	中	52.8
数学の勉強は大切だと思いますか	中	78.1

「思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的に答えた児童生徒の割合。参考のために中学校数学の数値も掲載。

数値から単純に読み取れることは、「大切だと思う割合と比較して、好きだと思う割合が低い」ということである。国語の勉強の必要性は8割以上の生徒が感じているが、学問としての魅力が不足している。関心・意欲をさらに高めていくためには、「生きていく上でこんなに必要なんだよ」「実生活でこんなに役立つんだよ」「知らなかったらこんなに困るんだよ」という類のアプローチだけでは弱い、といえるであろう。やはり、生徒たちの学ぶことへの関心・意欲を高めるためにより効果的なアプローチは、「今の自分」＝「現在も含めたこれからの自分」に学習している内容が生きている、という実感をもたせることであり、指導方法の工夫は、その点を十分考慮したものでなければならない。

次に、指導する教員側の意識についてアンケート調査したものの一部を紹介する。

質 問	(人)
国語の授業はとても好き・どちらかといえば好き	48
国語の授業はとても得意・どちらかといえば得意	36
国語の授業はかなり嫌い・どちらかといえば嫌い	69
国語の授業はとても苦手・どちらかといえば苦手	81

平成20年度、奈良県内の小学校で国語の授業を担当している教員117名の無記名アンケート調査回答実数。

質 問	(人)
現代文の授業のほうが古典の授業よりも好き	32
古典の授業のほうが現代文の授業よりも好き	10
現代文教材に苦手意識を感じる	0
古典教材に苦手意識を感じる	28

平成20年度、奈良県内の中学校で国語の授業を担当している教員42名の無記名アンケート調査回答実数。

母数が少ないため、統計学的には参考程度の調査結果になってしまうが、おおまかな傾向は読み取ることができる。今回の調査結果で注目すべき点は二つある。

- ・小学校では、69%の教員が国語の授業に苦手意識を感じている。
- ・中学校では、66%の教員が古典教材に苦手意識を感じている。

これらは、授業にのぞむ前の教員の意識であるので、多少なりとも指導内容に影響が出ていることは否めないであろう。指導に工夫を加えるためには、まず教員自身が関心・意欲を

もって教材に向き合うようにしなければならない、という課題が見えてくる。

(3) 学ぶことへの関心・意欲を高めるための教材開発の在り方

教材を開発するという事は、学習指導要領における「①指導事項」を実現するための「②言語活動例」を具体化するということになる。例えば、次のような項目内容である。

- ・ 日常生活の中の話題について報告や紹介をしたり、それらを聴いて質問や助言をしたりすること。
- ・ 図表などを用いた説明や記録の文章を書くこと。
- ・ 表現の仕方を工夫して、詩歌を作ったり物語などを書いたりすること。
- ・ 作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと。

素材集めの方法については、インターネットの利用、図書館や文化施設の利用、各種研修会、個人の趣味を生かした取材、同僚からの提供等、多種多様な方法が考えられるが、生徒が関心・意欲をもつための素材選びでは、次のような観点が考えられる。

1. 社会や生徒たちの間で常識だと思われていることが、実際には違っている事例。
2. 生徒が意識せずに過ごしていることに、思わぬ意味や背景があったりする事例。
3. 全く知らなかったことを知ることで、新しいものの見方ができるようになる事例。
4. 学習した内容が、今の自分自身や身近な人やものの存在とかかわっている事例。

生徒の心を揺さぶるということは、驚きや発見をもとにしてより深い理解につなげていくということであって、決して新しい知識の押し売りではないことを、私たち教員は常に肝に銘じていなければならない。

(4) 学ぶことへの関心・意欲を高めるための評価の在り方

評価は公正であり、学習事項のすべてが反映されたものが理想であることは間違いないであろうが、きめ細かな評価をしたいがために、詳細な項目を挙げて時間をかけていく評価方法が望ましいということではない。生徒と教員の実態に即したよりよい評価の在り方というのは、個人レベル、学年レベル、学校レベルのすべてを見通した上での、バランスのよいものにならない。決して固定し続けるものではなく、何度でも柔軟に見直しながらよりよいものに上げていこうとする心づもりが必要であろう。

- 評価を見た生徒が納得し「もっと頑張ろう」という意欲がもてるものであるか。
- 評価を出すまでの労力が、教員が納得できる適切なものであるか。
- 評価内容が資料等になって、以後の教育活動に活用できる状態のものであるか。

参考文献

- (1) 国立教育政策研究所 教育課程研究センター『平成20年度全国学力・学習状況調査解説資料』（平成20年4月）P.1-21. <http://www.nier.go.jp/08chousakekka/index.htm>

2 事例

(1) 単元の構想

ア 単元名 「視点を変えて書こう」新たな自分を発見する (第2学年)

イ 研究テーマの設定

このテーマを選んだのは、生徒一人一人に「書く」力を育てていきたいという思いからである。その理由として、次の二つがある。まず一つは、自分の考えを書き表すときに、自分もっている知識や感情を活用しきれていないと感じることが多いことである。例えば、夏休みの宿題として書く生活作文では、体験した事実を単純に時間通りに並べて書くだけの内容が多くある。また、クラスのお礼の寄せ書きでは、感謝の言葉を書くだけで、他の生徒と同じような文面しか書いていないといった場合がある。また、テスト問題を解くときには、記述問題が苦手で、何も書かない生徒やなかなか的を射た解答までたどり着けない生徒が多かったりする。これらは、「書く」ことに対する意欲のなさ、体験したことを自分の感情をこめて文章にすることへの抵抗感、文の書き方の未習得が原因ではないかと考えた。

そこで今回は「書く」授業を通して、まずは生徒が「書く」ことに興味をもてるように、そして、「書く」ことに対して苦手意識をもつ生徒の抵抗感を減らしたいと考えた。それが、自分の考えを相手に的確に伝える力を付ける第一歩になるはずだからである。

「話すこと」に比べて、「書くこと」は、形として残るという大きな特徴がある。自分が書いたものを読むことで、自分の考えを再確認することができ、場合によっては書き加えたり書き直したりという作業につながる。この繰り返しによって、自分の考えが更に明確になっていく。また、それは、書いて伝える相手にとっても、その人をよりよく理解することにつながっていく。そして、お互いに、うまく伝える方法や文章そのものを交流することで、より一層「書く」力を高め合うことになる。加えて、「書く」力は個人的な関係だけではなく、将来の社会生活の中での対人関係をはじめ、インターネットなどの情報交流の中でも、物や人の見方を左右する重要な部分を占めると考えられる。つまり、「書く」力をつけることは、コミュニケーションを広げていく上での基本となる力をつけることだと言える。

ウ 学習指導要領との関連

学習指導要領中学校国語の第2学年及び第3学年の内容「B 書くこと」の指導事項は、「ア 広い範囲から課題を見付け、必要な材料を集め、自分のものの見方や考え方を深めること。」「イ 自分の立場及び伝えたい事実や事柄を明確にすること。」である。今回の単元は、視点を自分自身から他のものや人に移し変え、その視点から自分自身を見つめて文章を書くという内容である。他の視点から見ることで、客観的に自分自身を見つめ直すことができ、先ほどの学習指導要領の指導事項について十分な指導ができると考えられる。

また、年間指導計画の中で「書く」単元の学習時間は限られているため、生徒に効果的に取り組ませるにはどうしたらよいかを考えた。それには、生徒一人一人が意欲をもって取り組むことが必要である。その意欲を高める工夫として、次の二点を考えた。

第一に、楽しみながら取り組める教材を選ぶことである。「書く」ことが楽しいと思える内容として、生徒が得意とすることを取り上げた話題、身近な話題、イメージしやすい話題などが考えられる。このような自分の生活に密着した話題を選べるという意味で、「視点を変えて書こう」は、意欲的に取り組める教材であると考えられる。視点は変わるものの、描

いていく世界は身近な話題になるからである。

第二に、生徒が自分自身の力を知り、段階を踏んで「書く」力を付けられるようにすることである。つまり、「今の自分の力はこのあたりだ」「次はどんなことを目標にしよう」ということを自分で分かっているならば、課題に取り組む姿勢も前向きになると考えたのである。具体的な方法として次の①～③を試みた。①授業の導入として第1時にテスト形式の抜き出して答える問題に取り組ませたこと。②単元の最初と最後に自己評価表にしたがって自己評価をしたこと。③学習に用いるワークシートを毎授業後回収しコメントを入れたこと。である。

(2) 単元の目標と評価規準

ア 単元の目標

- 様々な文体に興味を持ち、文章を書くことを楽しむ態度を養う。(関心・意欲・態度)
- 視点を定めて文章の形態を工夫し、適切な構成を考えて書く力を養う。(書くこと)
- 文体、文末表現を工夫し、効果的に使う。(言語についての知識・理解・技能)

イ 評価規準

	ア 関心・意欲・態度	イ 書くこと	ウ 言語についての知識・理解・技能
単元の評価規準	様々文体に興味を持ち、文章を書くことを楽しむ態度を養っている。	視点を定めて文章の形態を工夫し、適切な構成を考えて書いている。	文体、文末表現を工夫し、効果的に使う。
学習における具体的な評価規準	①問題に意欲的に取り組んでいる。 ②自らの文章を積極的にふりかえり自己評価している。 ③楽しみながら文章を書いている。	①視点を变えて、他者から見た自分像を書いている。 ②決めた視点のイメージに合った表現で書いている。 ③文章の構成を考えながら書いている。 ④文章を推敲している。	①違う視点から見た自分をイメージできるように、文体を工夫している。 ②自分を客観的にとらえた文末表現になっている。

(3) 指導と評価の計画

時数	学 習 活 動	評価規準との関連	評価方法
1	・書き抜いて答える問題による自身の力の把握 ・「書く」力の説明を聞く	アー①	テストプリント
2	・「書く」ことについての事前の自己評価 ・文章を書くために、視点となるものを探す	アー②	ワークシート 行動観察
3	・視点となるものの決定 ・選んだ視点と自分との関係の整理	イー① ウー①	ワークシート
4	・文体、文章の構成の決定 ・選んだ視点に立って、文章を書く	イー②	ワークシート
5	・文章の推敲 ・文章の完成	アー③ イー③,④	行動観察 ワークシート
6	・文章を書き終えた後の自己評価	アー②	ワークシート

(4) 学ぶことへの関心・意欲を高める指導と評価の工夫**ア 準備の段階での工夫**

学習を進めるにあたり、ワークシート（表紙を含めて6枚）を作成した。ワークシートを作ることで、生徒が事前に学習の全体的な流れを把握しやすくとともに、クラスが同じ流れに沿って学習を進めやすくなると思ったためである。指導者側からは、ワークシートを毎授業後に回収・点検することで、それぞれの生徒の進み具合が把握でき、次の授業でのアドバイスにも生かすことができるという利点もあった。

ワークシートの最初のページは自己評価表にし、学習前と学習後に自己評価ができるようにした。また、それぞれのワークシートには目標を明記し、それぞれの段階での到達目標がはっきりわかるようにした。全体にわたっては、生徒が使って分かりやすいものを心がけ、指導者が実際に書き込みながら作ることで、授業での説明にも生かすことができた。

イ 導入の工夫

導入として、教科書に掲載されているものや公立入試に過去に出題された3題の抜き出して答える問題に取り組みさせた。これは、生徒自身が自分の力を知ることが目的である。「書く」力を育てるためには、文章から読み取る力も不可欠である。「書く」力の第一歩として読み取る力を意識させるねらいがあった。生徒には、そのことを十分説明した上で問題に取り組みさせた。「書くこと」が、国語学習の中だけではなく、日常生活のいろいろな場面で登場するという、だからこそ「書く」力が必要とされることもあわせて説明した。

ウ 授業を進める上での工夫

- 授業の初めに、前時の復習を兼ねて、何人かの生徒のアイデアを紹介した。他の生徒の考えを知ることで、自分の考えを深めることができ、良い刺激になっていた。
- 生徒がワークシートに取り組む時間と、指導者の説明の時間とのバランスをとるよう配慮した。説明する内容は授業前に厳選して、授業ではコンパクトに説明することが必要である。取り組む時間を確保したことで、生徒は落ち着いて考えることができたようである。そのことによって机間指導し、個別にアドバイスをする時間も確保できた。
- 授業の中で、生徒同士が自由に意見交流する場面を数回設定した。自由な雰囲気の中でお互いの考えを交流することは、予想以上に効果的であった。自分一人の考えでは出なかったヒントをもらった生徒が多かったようである。

(5) 指導の実際

時数	生徒の学習活動	教員の支援	評価方法
1	○ 抜き出して答える問題に取り組む。 ・問題を聞き取り、教科書等の文章を読んで、抜き出して答える問題を解く。 ①教科書 既習の文章から1題 ②教科書 未習の文章から1題 ③公立入試過去の問題から1題	・問題文を朗読する。 (生徒には解答欄のみのプリントを配布しておく。) ・文章から読み取る力も、「書く」力につながる大切な力であることを説明する。	アー① 行動観察
2	○ 文章の視点となるものを探す。		

<ul style="list-style-type: none"> ・内容に入る前に、自己評価に取り組む。 文章を書くときにいつも困っていることは何かを書く。 ・キーワードを決める。 (「クラブ」「学級」など複数考える。) <ul style="list-style-type: none"> ↓ ・キーワードの中に存在するもの(人)を、思いっただけ挙げる。 <ul style="list-style-type: none"> ↓ ・自分から見て、近い存在なのか遠い存在なのかを考えながら「自分再発見マッピング」に書き込む。 <ul style="list-style-type: none"> ↓ ・「自分再発見マッピング」に書き込んだものの中から、一つを視点として選ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の弱点を意識できるよう配慮する。 (今回の学習で弱点を克服することを目標にして) ・「自分再発見マッピング」を使いこなせているかを確認する。 ・記入できたところを見計らって、生徒間の意見交流の機会をつくる。その後、自分の案をさらに練らせる。 ・自分についての文章を書くために、自分に近い存在を視点に設定するよう助言する。 	<p>アー② ワークシート</p>
<p>3 ○ 選んだ視点と、自分との関係を整理する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・選んだ視点が自分とどういう関係なのかを、次の点にしたがって整理する。 <ul style="list-style-type: none"> ①視点との出会いとその時の印象 ②お互いの関係 ③視点との思い出 ④その他 ・視点から、自分自身を見た文章を書く。 (視点のつぶやき、ぼやき、「自分」への励ましの言葉など) 	<ul style="list-style-type: none"> ・作文の題材になるので、イメージを膨らませて、いろいろな場面をたくさん書いておくよう指示する。 ・視点から見た自分はどう映っているか、他者から見た自分をイメージして書くように指示する。 ・生徒間の意見交流の機会をつくる。その後、自分が書いた部分を確認する。 	<p>ワー① ワークシート</p> <p>イー① ワークシート</p>
<p>4 ○ 文体、文章の構成などを決定する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・同じ内容で、文体などの違う二つの文章を聞き比べて、その違いを発表する。 <ul style="list-style-type: none"> ↓ ①主人公の猫のイメージは? ②文章全体から受けるイメージは? 	<ul style="list-style-type: none"> ・「吾輩は猫である」冒頭を活用し、次の点が違う二通りの文章を朗読する。 <ul style="list-style-type: none"> ①主人公の呼び方 「吾輩」→「わたくし」 ②文末表現 「～である」(常体) →「～でございます」 	

	<ul style="list-style-type: none"> 自分が選んだ視点について考え、視点にふさわしい呼び方や文体を決める。 ①視点となるもののイメージをよく表している一人称を考える。 ②一人称と照らし合わせて、イメージに合った文末表現を考える。 文章の構成を考える。 段落ごとの内容や話の展開を考える。 自分で考えた文体、文章の構成をもとに文章を書き進める。 	<p>(より丁寧な敬体)</p> <ul style="list-style-type: none"> 性別や年齢、性格によって変わってくることを指摘する。 (吾輩・オレ・ぼく・ワシ) 敬体や常体、方言など、いろいろな表現を考える。 (～である・～です・～だ・～じゃ・～やな) 書き出しには特に工夫するよう助言する。 次回、推敲する機会をつくるので、細かい部分は気にせずにかける。 	<p>イー② ワークシート</p>
5	<p>○ 書いた文章を推敲し、完成させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 視点からとらえた自分の言動や性格を想像し、よくイメージして書く。 最後まで書けたら、自分の目でもう一度読み直し、赤ペンでチェックを入れて推敲する。 ①誤字脱字がないか。 ②分かりやすい文になっているか。 ③話の展開に無理がないか。 ④視点の様子(性別・年齢・性格など)が文体と一致し、なおかつ全体を通じて同じ調子で書かれているか。 <p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> 清書用のプリントに清書を始める。 	<ul style="list-style-type: none"> 机間指導をし、ポイントを確認しながら、助言をする。 ①視点と自分との関わりが書かれているか。 ②視点から見た自分の様子や行動がとらえられているか。 ③視点からの、自分に対する思いが書かれているか。 ④視点から見た、これからの自分との関わりについて書いているか。 	<p>アー③ 行動観察</p> <p>イー③ ワークシート</p> <p>イー④ ワークシート</p>
6	<p>○ 自己評価をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分で書いた文章を読み、さらに推敲できる部分がないか確認する。 <p style="text-align: center;">↓</p> <ul style="list-style-type: none"> さらに完成度の高い作文を目指して、清書を完成させる。 学習後の自己評価を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 前回書いた作文を返却し、もう一度読み返すよう指示する。 学習前と比べて、意識がど 	<p>アー②</p>

学習を振り返り、自分がよくできたと思うことをまとめる。	う変わったか、何ができるようになったかを考えるよう助言する。	行動観察 ウー② ワークシート
-----------------------------	--------------------------------	-----------------------

(6) 成果と課題

ア 生徒の変容と成果

- 今回の学習を通して、作品づくりに面白みを感じ、いろいろな想像をはたらかせて積極的に文章を書き進めている生徒の姿が印象に残っている。生徒たちを前向きにさせたものは何なのだろうか。生徒たちに、一つの文章を書くために、これだけ多くの準備をさせたことは少ない。視点（今回の文章では「主人公」）の語り口を考えるために性別や年齢を想像したり、構成を一段落ずつ細かく計画したりと、一つ一つの取組があったから、生徒自身にも印象に残るような文章が生まれてきたように感じる。そして、それだけ思い入れのある文章だからこそ、より完成度をあげたいと思い、推敲にも真剣に取り組むことができたのではないかと考える。
- 推敲の重要性を実感できた生徒が多かったようである。自分が一度書いた文章をもう一度読み返すなかで、単純な字の書き間違いをはじめとして、多くの箇所を自分自身でチェックできた経験が大きかったと考えられる。チェックした内容としては、前後の内容の入れ替え、助詞の使い間違いの訂正、意味が通らない文の修正、視点の語り口に合わせた文末表現の訂正などがあった。

<生徒の感想から>

「学習前に比べて、とてもうまく書けました。清書の前に一度書いたもので、まちがいは見つけられず、いつもよりうまく書けた気がします。これを続けていきたいです。」

- 自分自身を違った角度から見ること、自分でも気付かなかった部分を発見することができた生徒もいた。自分が大切にしていると考えていた物でも、ときには乱暴に扱っていたり、何日も放っておいたり、自分本位な部分も感じ取れたようであった。またそれが、相手の気持ちを思いやることにつながったという感想を書いている生徒もおり、自分の内面を深めるきっかけになった。今回の学習の目的を達成できている事例である。

<生徒の感想から>

「相手がどんな気持ちなのかとか、どう思っているのかとかがよく分かりました。これからは相手のことをよく考えて接していきたいと思いました。」

- この学習の後に実施した定期テスト（2学期中間考査）において、記述問題に意欲的に取り組む生徒が増えた。実際に生徒からも、「頑張って書きました。」「（書く問題を）全部書けた。」などの声を聞き、嬉しく思った。この学習の導入で「書く」力の大切さを話したことが、生徒に伝わった結果ではないかと考えられる。ただし、残念ながら次の期末テストでは、中間テストほどの意欲は見られなかった。「書く」力を育てるためには、継続した指導が大切だと考えられる。
- 授業計画を練ったり、ワークシートを作成したりと、授業を始めるまでの準備段階での苦労が多かったが、その分、生徒の意欲付けにつながった。独自に作成した資料なので、生徒に対しても自信をもって説明できたことも良かった。学習を進めるなかで、別の資料も追加した。例えば、「視点が自分自身をどう呼ぶか」という部分で「一人称」が話題

にあがったので、日本で使われている一人称を一覧にした資料を作成した。そのような資料にも生徒は興味を示し、それを生かして作品を作り上げることができていた。

イ 改善したい点と留意点

- 学習の最後の場面で、完成した文章を生徒間で交流する機会を作りたいと考えていた。しかし、実際の授業では、それぞれの作文を清書するのに時間がかかってしまい、実現できなかった。生徒一人一人が完成させた作文をお互いに読み合う時間が確保できれば、相手のことを理解することができ、書くことに対しての新たな発想につながったのではないかと感じる。
- 教科書の指導書などにあるワークシートを使った授業をする場合でも、そのワークシートは自分で手直しし、独自のものを作成するとよい。その利点として、指導者自身が納得して使うことができること、生徒の実態に合わせて書く力を身に付けさせられることがある。また、ワークシートを授業で使う前に、自分が生徒になったつもりで実際に取り組むべきである。どの部分が書きにくいのか、どこでどのようなアドバイスを入れると書きやすいのかなど、把握でき、実際の指導につながるからである。
- 実際に文章を書き始めるのは、全6時間の中で第4時の後半である。半分以上の時間を費やして書く準備をすることになる。生徒たちが文章を書き始めるまでに、文章に書くほとんどの内容がワークシートにメモできているという状態にすることが理想である。そのためには、学習の前半部分で、生徒がいかに自由な発想をして、イメージを膨らませていくのかにかかってくる。生徒間の意見交流の時間をもったり、生徒が興味をもちそうな話題を提供したりといった工夫が必要である。目の前の生徒の実態に合わせて工夫することが大切である。